

---

# 囊の城

デウムデウム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

囊の城

### 【Nコード】

N8915D

### 【作者名】

デウムデウム

### 【あらすじ】

本能寺の変から数年、時代は、織田から豊臣に代わろうとしていた。しかし、それを阻止しようとする者たちも存在した。

## 寝る忍者(その1)

「…敵は本能寺にあり!」

以前に見た予知の映像が浮かびあがる。

「あゝあゝ…何故、俺は今までこれを忘れていたんだ!? 何故、思  
いだせなかったんだ? …悔やむのはやめだ。今は、殿の仇を討つこ  
とのみを考えるとしよう。」

世に言う中国大返し、これにより、謀反を起こした明智勢は、救援  
を得られることもなく討ちとられることとなった。

だが、ここに一つの大きいなる野望があったことは誰も知らない。

時が過ぎ、柴田勝家すらも討った彼は、天下まで後一步というところ  
までできていた。

「(殿は、かつて、ここまで来た。殿さえいれば、こんなに時間も  
かからなかっただろう。) 私が今から取る天下は殿のものだ。」

彼の名は、豊臣秀吉。織田信長にサル2号と呼ばれながら仕え、後  
に日本の王となるべき男である。

難敵であつた徳川家康をも討ち倒し、不穏な動きを見せる北条の残党の監視として家康の動きも封じた。

誰も彼に抵抗するものはいなくなり、天下をその手におさめた。

そんな頃、彼の周りでは賊が出回っていた。

どんな嚴重な警護をしても忍びよるそれはついに秀吉の前に姿を現す。

「よ、ニセザル。」

「お前だつたのか、えーと、桑畑三十郎だつたか？」

「カー！わざと言つてんのか？ヒヨシと記憶共有したんだろ？これでも、ヒント出したんだせ。盗品のイニシャルが俺の名前になつてたりと。」

「いや、そのメッセージが桑畑三十郎となつてたんだぞ？」

「あれ？そうだったか？まあ、他人にわからなくていいじゃねーか。」

「で、何のようだ？」

「いや、俺も盜賊生活が飽きたんでね。俺を雇わないかと思つて。安くしとくぜ。」

「いくら、知り合いとはいえ、盜賊を部下にはできんだらう。」

「死んだことにすればいい。俺くらい名が売れるとその死を見たがるやつも多いだろが、残酷な殺し方なら見なくてよかつたとさえ思える。その後の抑止力になるし、殺しの噂だけが一人歩きする。天下人の言葉だ、お前が言えば、俺は死ぬ。」

## 寝る忍者（その2）

「何故、お前のためにそこまで…」

「気付いてないのか！？お前、命を狙われているんだぞ？」

「何？」

「嘘じゃない。家康…いや、服部半蔵だ。やつ、どうしても天下がほしいようだな。」

「あいつか…」

「北条の残党とかも引き入れて巨大な影の軍団を用意しているらしい。因縁を超えての結束、差し詰め、伊賀・風魔・甲賀の連合軍団といったところか。」

「それが本当だとして、何故、お前が俺を助ける？」

「…結局、ヒヨシもあのバカ殿も助けられなかったからな。」

「…ヒヨシか…よし、お前を信じよう。すまないな。」

「そのための用心棒だろ？」

「武田も今川も北条も滅んだ。このまま豊臣が天下を取れば、忍者は消える。豊臣は潰しておく必要がある。」

「本当によいのですか？徳川のためとはいえ、忍が国との戦争など

…」

「才蔵か…いまさら、くだらぬ質問だな。」

「しかし、百地様…」

「いい加減にしろ！皆の意思を揺るがす気か！？」

「フフフ…この場で揺らぐようなやつなら、初めからここにいませんぜ。…先陣は、この由利めに任せてもらえませんか？」

「確かに、そうであったな。よかろう、好きな人員を連れていくがいい。」

20を超える忍者が大坂城に忍び込んだのは、その日のことだった。

「これが難攻不落の城か。他愛もない。」

「全くその通りだと思っぜ。」

「何者だ？」

「用心棒、桑畑三十郎。」

「知らぬ名だな。」

「名を売るのは得意だし、俺の場合、名が売れば仕事がしやすくなるんだが、お前たちは覚えなくていいぜ。死人に口無し、それじゃ名は売れない。」

「貴様…者どもかかれ！」

「そのセリフにこの雑魚…やれやれ、どこの悪代官だよ？」

「くっ…これほどの技を使うとは…貴様、忍びか？」

「聞くまでもねーだろ？ニンニン言ってないと忍びじゃないと思ってるのか？」

「…由利鎌之介、参る！」

「グッ…これほどの腕の忍びが、何故豊臣方に！？だが、私を倒したところで第二・第三の忍びがここを襲う。」

「ゴジラかよ！…まあ、あんたの腕も大したものだったぜ。」

## 影の軍団たち(その1)

「…そろそろ大坂城が燃え落ちててもよい頃だが？由利め、しくじりおつたか。あの城、予想以上の戦力があるらしい。いったん、退き、体勢を整えさせてもらおう。」

町の外れに控えていた忍者たちは、退避していった。

「相変わらず、強いな…」

「いや、昔の俺なら死んでいた。お前と初めて会ったとき、多人数による連携技の恐ろしさを知ったんだ。泥棒になったのも、大勢に追われることでそれに慣れるためもある。」

「その頃からこの事態に気付いていたのか？」

「いや、さすがの俺でもそれはない。最初は、あの忍者へのリベンジのためだった。」

「そうか…これからどうするつもりだ？」

「忍者に対しては忍者を置くのが定石なんだが、あんな連合があるんじゃない。下手に忍者を雇っても裏切りが出るだけだ。俺以外に信用できる忍者を二人用意してくれ。」

「二人でいいのか？」

「ああ。向こうがこちらの思う通りに動いてくれればだが…」

「わかった。」

「それと、いざとなったら、自分の身は自分で守れるように、以前の護衛術くらいは思い出しておけよ！」

「ああ…」

大坂城での戦闘から数日が過ぎた頃のこと…

「本当にあの二人だけでよかったのか？」

「ああ。お前の連れてきた二人、随分、飲み込みが早い。おそらく、もうすぐ数人の密偵が来るはずだ。」

「密偵だと？」

「ああ、先陣が予期しないところで消えたんだ。やつら、もう一度情報を調べに来る。そのときが勝負だ。」

「大丈夫なのか？」

「ああ。任せておけ。準備は万全だ。」

「これより、計画の最終確認を行う。まず、二組に別れ行動を開始し、まず、お前たち四人は、四方から大坂城に潜入し、その様子を探る。先の先陣の失敗から、討たれる可能性を考え、もしものときはそののろしをあげ、居場所を教えろ！私たち四人は、そののろしの場所を探りにいく。異論無いな？…では、決行だ。」

## 影の軍団たち(その2)

大坂城の四方からのろしが上がった。

「あー。もうひっかかったのか。しかし、のろしとは向こうもわかりやすいんだろぅが芸がない。まあ、こっちにバレるのを…いや、バレているのを覚悟した上での行動とっておこう。さて、あののろしの場所はあるの二人に任せるとして、俺は残りの三ヶ所の警備に向かうか…」

「由利殿、何故あなたがここに!？」

「…豊臣方についたままでのこと。」

「では、先陣部隊は皆、裏切ったのですか？」

「ああ。それだけではない。風魔・甲賀の多くは豊臣方に着くことにいる。」

「何故です？」

「伊賀への恨みはそれだけ強いのだ。上は忍びの世のためを考えているようではあるが…積年の恨みがそんな理由で簡単に消えると思うのか？」

「…わかりました。まず、あなた方を始末し、江戸へ戻り対策を練るとしましょう。」

「できるかな?もうすでに、私の部下たちに囲まれているのだぞ?」

「な!?!心配など感じられなかった場所からクナイが!」

「そこだけではない。八方から狙われている。」

「何?…今度は、真逆の場所から!…確かに、囲まれているらしい。しからは…」

巨大な火柱が上がり、それと同時に忍者は消えた。

「…早く、この情報を百地様に伝えねば…しかし、まさか、風魔や甲賀が裏切るとは…いや、元より仕えている者が違い、頭領さえも違うのだ、こうならぬ方がおかしかった。いくら、協力して豊臣を倒したとしても、そののちにこうなっていたことだろう。…由利は、風魔も甲賀も裏切ると言っていた。百地様のためにも、やつらが行動に乗り出す前に早く伝えておかねば…」

### 影の軍団たち(その3)

「お前たち二人が、あいつの選んだ忍者か。さすがは天下人、人を見る目があるようだ。」

「我々は何を？」

「まずは、名前を捨てろ！」

「な、何故です!？」

「忍者にとって名前が重要なのは、俺も知っている。師匠から与えられる一人前の証だからな。だが、それだけにそれは流派を表す。」  
「それを隠すためのだけのために？」

「ああ。そうなれば、使えない技やどういふ道具を使うかがバレてしまう。まあ、それを補う修行もそのうちやらせるつもりだが、今は時間がない。」

「しかし、いきなり新たな名前など。」

「思いつかないか？」

「例えば透破のお前は、今名高い武将笥虎秀の息子として笥十蔵とかどうだ？」

「笥十蔵……」

「ああ。だが、その名もふせておいてもらう必要がある。……まあ、その話は後だ。もう一人、軒猿のお前の名前は、軒猿の猿から、猿飛：猿飛サスケってのはどうだ？」

「猿飛サスケ……」

「気に入ってもらえたようで何よりだ。じゃあ、計画を話すとしてしよう。簡単なシナリオは、伊賀対風魔・甲賀。そのためには、ケースバイケースで修正が求められることになるから、それは随時伝えていくことにしよう。今回は、笥が由利に変装し、猿飛がその援護に回る。笥には、由利の細かな仕草まで真似られるようになるための特訓を行い、猿飛には、援護のための修行を行ってもらおう。これが今回の修行だ。その間に俺は、敵の偵察と罠の制作を行う。」

「了解しました。」

## 影の軍団たち(その4)

「おいおい、こんな古い罠にひっかかってたのか!? まだ、二重三重の罠を用意してたんだぜ? だいたい、地図なんか頼るからトラップなんかにはまるんだ。忍者なら五感だけで行くものだろ?」

「…これは!？」

「確認役が来たか…おい!」

「ん? うあ…」

「振り向きざまで悪いが、さすがに多勢だ、これくらいはアリだろ。…残り2ヶ所も見ていくか…」

「よし。これで、箕と猿飛に任せた場所以外は片付いた。他に、忍者がいらないか見てまわるついでに、やつらの動きを見ていくか…」

「よし。箕のやつ、由利に上手く化けている。変装術で名が通った透破だけのことはある。それに、猿飛もよくやっている。さすがは忍者を討つ忍者キラーと言われるた軒猿の出だ。相手に気配を探られることもなく、相手の周りをうまく回っている。…お! 相手は、火遁か。相手が火に目をやった隙に逃げるとはいえ、あの火はでかすぎだろ! 遁法を攻撃技と勘違いしたどっかの忍者漫画じゃないだろうか。」

「…だが、あれだけの火を出せるとは…相手の腕もさすがなものだ。」

あの切り返しの早さ、百地丹波を思い出させやがる。

その流派を受け継ぐやつか? 警戒しておく必要はあるな。

そうか、百地か…伊賀総出か…そろそろヤツも動くかな。

まあ、伊賀だけで足りないかと踏んだから、甲賀や風魔にまで協力を求めたんだろうからな。

…しかし、百地か…ホント、なつかしいな。

情報じゃ、今は、あの百地丹波の孫、百地三太夫、二代目百地丹波が当主だったか…百地丹波、俺の忍術の師ではあるが、俺を殺しの道具にしようとしやがった。

俺が伊賀を抜け、百地のもとから去った後、百地丹波はあの服部に討たれ、伊賀は服部半蔵の指揮下に入ったらしい。

服部半蔵を師の仇とは思っちゃいない。師を超えるための存在とさえ思えない。俺はもう百地と関係無い人間だ。俺はあの後、北条の風魔や武田の透破でも術を学んだ。実際、どれくらい百地に追いつけたかは気になるが、それよりも服部半蔵にリベンジしてみたい、そして、今度こそ人を守りきってみせたい。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8915d/>

---

囊の城

2010年10月9日20時23分発行